



名古屋の子供獅子舞 ―烏森三社秋祭り―

リニューアルレポート 3

津田 卓子

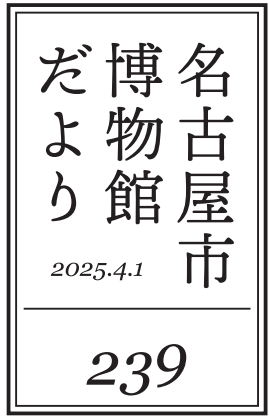
令和六年（二〇二四）八月から第一期工事が進行中です。今回の工事では既設の空調設備やトイレなどの衛生設備、電気設備の撤去と、耐震補強が目的となっています。現状では敷地がフェンスで囲われており、工事関係者以外の人間がエリア内に立ち入ることができません。

しかし、今回、特別に現場内写真を撮影する機会を得ました。写真を見ると天井がはがされ、コンクリートの梁が露わになっていたり、壁面展示ケースがとり払われたりしている様子が分かります。元の場所がどこであったか、にわかに判断がつかないほどです。撮影した富田学芸員は、今は壊している段階で、リニューアルはまだまだこれからなんだと実感したこと。同七年三月には第一期工事が終了し、いよいよ本工事にあたる第二期工事に切り掛かります。

（次ページへ）



写真1 二階常設展 竪穴住居跡周辺 左上は一階部門展示室



リニューアル レポート 3



金銅五鈷杵 ―森川コレクション―



名古屋博物館だより 239 号
令和 7 年(2025) 4 月 1 日
年 2 回(10 月、4 月)発行

編集・発行／名古屋博物館
〒 467-0806
名古屋市瑞穂区瑞穂通 1-27-1
TEL 052-853-2655
FAX 052-853-3636
<https://www.museum.city.nagoya.jp>

古紙を含む再生紙使用

公式ロゴ・シンボルマークをつくります

実は当館には公式のロゴやシンボルマークがありません。そこでリニューアルの機会をとらえ、これらを制作することにした。令和六年八月にプロポーザル方式で募集したところ、十一者から手が上がり、外部有識者を含めた評価委員で各提案を審査した結果、ある一案に決定したのが十一月。今は実用に向けて細部の調整や利用におけるガイドラインについて検討しています。ウェブアクセシビリティへの対応、英文と和文を組み合わせたときのバランス、サイズが小さくなった場合の見やすさ、視認性を高めるための工夫など、長年使用することになるだけに考慮すべき箇所がたくさんあります。とりわけ配色については、コンセプトはそのままに、印刷インクでの再現が可能か、そのうえで印象に残るものとなっているかについて検討を重ねました。決定案は令和七年春に公開します。



写真2 シンボルマークの配色を検討する

大学生のアイデアをリニューアルに
「プラネタリウムすごい」、「知識が無い人が行つて良いのか躊躇してしまう」、「何があるのかわからない」。
地域の課題を解決する授業の一環として、名古屋市立大学医学部・薬学部・看護学部で学ぶ九名の学生たちが、当館が抱える課題「どうしたら若者が博物館に訪れたいと思うか」に取り組みました。冒頭の言葉は、彼らが検討を行うなかで、名古屋博物館のイメージについて採ったアンケート回答の一部です。回答者は十代後半を中心とした六二五人。明らかに科学館と誤認した感想もかなりあり、認知度がそもそも低いという厳しい現実を突きつけられました。これらのアンケート結果を受けて、メンバーからはSの活用や前庭でのイベント、商店街との連携、没入型・体験型アクティビティの実施などのアイデアが提案されました。先述した耳の痛い声を真摯に受け止めつつ、リニューアルに向けて、彼らの意見をおおいに参考にしていきたいと思います。

「なごやのうつりかわり」をデジタルでも

毎年、当館で実施していた「なごやのうつりかわり体験事業」、令和六年度は休館中のため、名古屋市美術館で開催しました。同事業は小学校三年生の社会科単元に合わせて実施するもので、昔の道具に触れながら生活様式の変化や暮らしの工夫について学ぶことができます。

本来は展示を見学したあとに体験へと進むのですが、その展示にあたる部分をデジタル教材として整備し、一月から公式サイト上で公開しました。こちらは「まちのうつりかわり」と「道具のうつりかわり」の二つのテーマを豊富な写真で紹介



デジタル教材「なごやのうつりかわり」

金銅五鈷杵

―森川コレクション―

伊藤 旭人



金銅五鈷杵 館蔵（森川コレクション）

仏教の法要では様々な道具が使用される。これらは一括して仏具と呼ばれているが、用途は実に多種多様である。例えば、仏像や経典など信仰対象を設置するためのものや、ほとけを供養する道具、音を発して読経の区切りや時を合図するもの、さらには密教の儀式、修法で使用する特殊な道具（密教に関する道具は法具という）といったように多岐にわたる。また宗派や流派によって使用・不使用が分かれるものや使用する場合であっても使用方法に差異が見られることもあり、筆者としては実に興味深いジャンルである。

今回紹介する仏具は、密教修法で使用する法具のひとつで、金剛杵に分類される五鈷杵である。金剛杵は修法において僧侶が手に執り、心中の煩惱を打ち砕くために用いる。古代インドの武器を祖形とするため、非常に鋭利な形状をしている。両端に表した鈷（刀状の突起）の本数に依じて五鈷杵・三鈷杵・独鈷杵と呼び、また火焰宝珠を表した宝珠杵、宝塔を表した塔杵と合わせて五つでセットをなし、これらを五種杵と称する。通例では、金剛杵の一端を鈷とした金剛鈴とともに金剛盤（低い脚が付く四葉形の台）にのせ、修法で使用する壇の上に安置する。本品は、両端に五股の鈷を表すことから五鈷杵と呼ぶ。

長さ十四・九センチメートル、銅製鑄造、表面には鍍金（金メッキ）を施して仕上げる。現状、鍍金のほとんどは剥落しており、地金が露わとなっている。中鈷（中央の鈷）は断面が四角形で、付根の近くに小ぶりの節を表し、各面にはごく僅かに匙面（さじめん）を取る。脇鈷（中鈷以外の鈷）は開きが小さくすばまり気味で緩やかなカーブを描き、端部において中鈷と接合している。脇鈷の各側面に

（次ページへ）

は樋を陰刻し、外側には嘴形（嘴形の突起）を表す。把手（持ち手）の中央には半球状に突出した楕円形の鬼目を四方に表し、その上下に単弁八葉（間弁付）の蓮弁飾を巡らして、甲丸面（甲羅のような丸面）を取った二本一組の紐帯で括っている。

総体的に細身に作る点をはじめとして、楕円形の鬼目や太い二本の紐帯、すばまり気味の脇鉾は鎌倉時代後期（十四世紀）の特徴を有しており、なかでも三重 西来寺や京都・泉屋博古館が所蔵する五鈎鈴の鉾部と様式的に近似している。しかし細部において表現に緩い箇所が認められることから、製作は前の二例よりも遅れて、南北朝～室町時代（十四～十五世紀）と判断される。

ところで、金剛杵は経典や儀軌に説かれた素材を用いて、その手法に則って作ることににより、霊力を増強させ、効験や



中央部分図

功德が得られるとされている。金剛杵に用いるべき素材やその功德について説く『陀羅尼集經』巻第二「作跋折囉并功德法」によれば、跋折囉（金剛杵の別名）を作る際は「五色之物」を用いるべきという。五色とは、金・銀・赤銅（いわゆる純銅）・鍍鉄（精錬された上質な鉄）・錫の五種の金属を指し、これらを合金して金剛杵を作るべきとしている。現存作例を見ると、本品のように銅で作って表面に鍍金を施した金銅製が大半を占めるが、近年の科学調査によって主原料の金や銅のほかに微量の銀や鉄、錫を含む作例も確認されている。铸造時の混入によるものとする見方が一般的だが、仮にこれが意図的なものだとなれば、経典に則った忠実な法具といえるだろう。ちなみに、法具の素材について説いた経典の中には、本来用いるべき素材を示したうえで、入手が叶わない場合の代用材を掲げるものもあり、法具に用いる素材がいかに

名古屋の子供獅子舞 ―烏森三社秋祭り―

天野 卓哉

名古屋市博物館リニユーアルにともなう調査の一環として市内の祭礼を訪ね歩いていると「子供獅子」に出会うことがあります。子供たちが獅子頭を被った子を先頭に「元気を出して、ワッショイ、ワッショイ」と掛け声を出しながら町内を練り歩き、大人たちからご祝儀やお菓子をもらったりするものです。

このような子供獅子はいわゆる「獅子舞」ではなく、舞や曲芸などの芸能をとまなうものではありません。名古屋市内では多くの祭礼で獅子舞が奉納されていましたが、民俗芸能として伝わる獅子舞はごくわずかとなってしまいました。子供獅子舞については中村区烏森に伝承されているのみです。烏森の子供獅子舞は貴重な事例といえますが、残念ながら、その歴史はよくわからないのが実情です。

中村区烏森は庄内川東側の平地に位置し、現在は名古屋駅にも近い閑静な住宅街となっています。烏森は南之切・中之切・町之切の三地区があり、南之切は天神社、中之切は神明社、町之切は八幡社をそれぞれの氏神として祀っています。子供獅子舞は地区ごとであり、三つの神社の秋の祭礼（烏森三社秋祭り）で奉納されています。

烏森三社秋祭りは十月第二月曜日（スポーツの日）を「本祭り」とし、令和六年（二〇二四）は十月十四日におこなわれました。午前には各地区で神楽屋形が巡行し、地区内の家々や飲食店、福祉施設などをめぐります【写真1】。午後一時頃から天神社で最初の祭礼がはじまり、神明社から八幡社への順で場所を移して、ほぼ同じ内容の祭礼が繰り返されます。最後の八幡社での祭礼が終了したのは午後四時頃でした。



写真1 神楽屋形の巡行（南之切）



写真2 お湯立て祭り（天神社）



写真7 夜祭り（八幡社）

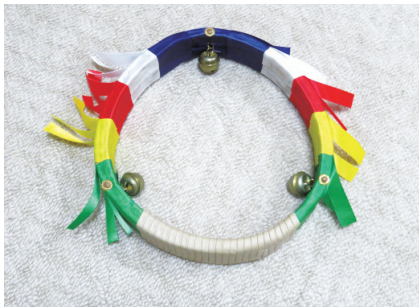


写真8 銭太鼓（南之切）

もう一つは子供獅子舞の採り物である銭太鼓【写真8】です。銭太鼓を用いる民俗芸能は愛知県内では三河地方の豊田市高岡地区駒場と高浜市高浜地区にあり、両者とも少女による舞です。高浜の場合は「えんちよこ獅子」という獅子舞（曲獅子）にともなうところが烏森と共通しており、獅子舞と銭太鼓の関連性や系譜の検討が今後の課題といえるでしょう。名古屋市内には烏森三社秋祭りのような注目すべき祭礼や年中行事などの民俗文化がまだまだ残されています。これからも民俗文化を訪ねて歩き、観察し、地域の方々からお話をうかがいながら、名古屋市博物館のリニユーアル展示などでご紹介していきたいと思います。

参考文献
新修名古屋市史編集委員会「新修名古屋市史 第九巻 民俗編」名古屋、二〇一一年
愛知県史編さん委員会「愛知県史 別編 民俗2 尾張愛知県、二〇一八年 伊藤厚史」名古屋市歴史文化基本構想で読み解く再発見！なごやの歴史と文化「なごや歴史文化活用協議会、二〇二〇年」

重要であつたのかが分かる。

また、金剛杵は師から弟子へ法を嗣いだ証として用いられることもあった。例えば『代宗朝贈司空大弁正広智三蔵和上表制集』巻第三には、広智三蔵が示寂する直前に皇帝へ捧げた金剛鈴や金剛杵など六種の品物は「先師所伝」、つまり師から伝えられた貴重な品であつたと記されている。広智三蔵とは、わが国へ初めて本格的な密教をもたらした空海の師恵果のさらに師である不空のことである。また別の例を見ると、唐から帰国後の空海が持ち帰った品物を記した「御請来目録』には、恵果より授与された仏舍利や仏龜、曼荼羅など八種の品物は、金剛智が南天竺国（インド南部）より持ち帰った品物で、それらを不空に授与し、それが恵果、そして空海へと継承されたことを記している。すでに指摘されるように入壇や灌頂を受ける際に師から弟子へ金剛杵を授与する例が見えることから、法具はいわゆる仏具としての用途に加えて、師弟関係において正式に教えを継いだことを証する役目をも担うことになったとみられる。

本品は、近代の尾張地方を代表する茶人である森川如春庵が蒐集した森川コレクションに含まれる品である。森川コレクションは昭和四十二年（一九六七）、翌四十三年の二度にわたり名古屋へ寄贈され、その後平成十八年（二〇〇六）の移管によって現在は当館の所有に帰している。古美術品の中には、本来の役目から離れて茶事や茶会のを飾る鑑賞品として「第二の人生」を歩んだ作品もしばしば見られ、本品も鑑賞を目的に用いられたとみられる。本品に見る中鉾に向かって穏やかに伸びる脇鉾や把部の括りの強い約冬線などの造形には、如春庵の美術作品に対する見識の高さを窺わせる。



写真3 神楽太鼓（八幡社）



写真4 南之切の子供獅子舞（天神社）



写真5 中之切の子供獅子舞（神明社）



写真6 町之切の子供獅子舞（神明社）